

トコジラミの国内における現状

あ だ ち ま さ や
足立 雅也

あだちPCOコンサルティング 代表

2023年5月以降に当社に寄せられるトコジラミの相談が増えました。人々の動きが活発になり、潜伏していたトコジラミが発見されたり、持ち運ばれて生息域が広がっていたりするのかもしれませんが。私の関わったトコジラミの相談や駆除の事例をお話しします。

トコジラミ大発生

2023年5月の相談でした。一戸建て2階奥の和室が発生源でした。部屋に入るとすぐのところに布団を敷いていたので目をやると、日中の明るい時間帯であるにもかかわらず、何十匹ものトコジラミが歩き回っていました。いくつものゴキブリ捕獲用の粘着トラップ（写真1）、ローラータイプ

の粘着クリーナー、手ごろな大きさにちぎったガムテープ（写真2）、かゆみ止めの塗り薬まとめて数本（写真3）が、布団を囲むように置かれていました。（これはやばいかも）と、生息数の多さを直感しました。その部屋を寝室としている男性は、毎日200匹程粘着テープで捕獲して処分していると言っていました。

それを聞いて大まかに計算しました。200匹×30日＝6,000匹。2ヵ月で12,000匹を殺虫したことになります。一体、この和室1部屋に何万匹のトコジラミがいるのでしょうか。また、家中に広がってしまっているに違いありません。ご家族の方は被害に遭っていないのでしょうか。

屋内を目視調査しながら質問して、状況を把握します。2年前くらいから被害に遭

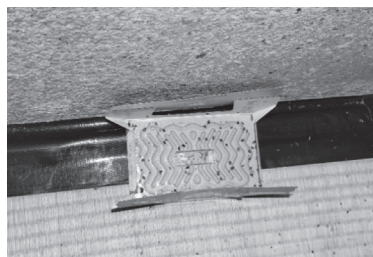


写真1 ゴキブリ捕獲用の粘着トラップ



写真2 トコジラミ捕獲用ガムテープ



写真3 かゆみ止めの塗り薬

い始めて、途中、部屋を使わない期間もありました。人が部屋に入らなくなると吸血できないので、自然にいとなくなると期待してたそうですが、残念ながら全く減っていませんでした。それでも、いつかはいとなくなるのではないかと期待して、自身で市販の殺虫剤で駆除をしながら我慢していました。家族は3人で、全員かゆいと言っています（写真4）。70代以上のお母様の寝室は1階です。これから気温が上がって、虫の活動が活発になると増えてしまうと思い、自然消滅は諦めました。料金もかかるだろうし、家のなかを見られるのも恥ずかしいので業者にも相談できなかったのですが、この猛烈なかゆみと睡眠不足の苦痛にもう耐えられないので、駆除を依頼する決心がついたそうです。

調査依頼が増えるか

あるホテルからトコジラミの生息調査依頼がありました。駆除ではなく生息調査？もちろん調査の結果、生息があれば駆除に

移行するのですが、初めての依頼内容でしたのでどうのことだろうと疑問に思い、率直に聞いてみました。そのホテルをパッケージでご利用した宿泊客が、帰宅後にかゆみが出てきたので、旅行代理店を通じてホテルに生息の有無を問合せしたという経緯でした。ホテル側は該当する部屋を売り止めにして、公平性も含めて専門業者に調査を依頼することにしたそうです。

かゆみの原因がトコジラミ由来なのか、別に原因があるのか。別の原因であれば疾病を疑い、早期に診察を受けるきっかけにもなります。そういう事情を考えると、なるべく早く調査して報告をしたほうが良いと思います。その行為は結果的にお客様や旅行代理店に対する、ホテルの信用にもつながります。スケジュールを調整して、翌日に生息調査を行いました。

トコジラミは隙間や物陰に潜伏していますので、ベッドを起こして裏側を（写真5）、机やヘッドボードは壁から離し（写真6）、カーテンは上部の折り目を開いて（写真7）、時間をかけて丁寧に目視調査を行い



写真4 トコジラミに刺された跡



写真5 ベッドの裏側を目視調査



写真6 ヘッドボードの目視調査



写真7 カーテンの目視調査



写真8 布団の目視調査

ました。それにも関わらず、生体、死骸、脱皮殻、卵、糞などの生息の証跡は何も見つかりませんでした（写真8）。見つからないだけで潜伏しているリスクは拭えませんが、これらの結果は、かゆみの原因はトコジラミ以外も検討したほうが良いという方向を示す材料になりました。少し前までは「かゆみ＝ダニ」という疑いをかけられることが時々ありましたが、トコジラミの認知度が上がってきた最近では、「かゆみ＝トコジラミ」の疑いもかけられるようになったのだと思います。

持ち込んだのは誰か

あるホテルからトコジラミ駆除依頼を受けました。宿泊客が夜間に、トコジラミがシーツの上を這いまわっているところを見たとのこと。殺虫剤噴霧の前に、まずトコジラミを発見した部屋の両隣と向かい3部屋の目視調査を行い、生息があればその隣へと範囲を広げて、トコジラミの生息域を特定します。調度品を動かして、物の裏側や部屋の隅々まで生息の有無を確認します。今回の目視調査では必ず確認したい両隣、向かい3部屋でトコジラミ生息の証跡は見つかりませんでした。予防のため残留噴霧をします。作業時にトコジラミを衣類や道具に付着して他の部屋に持ち運ばないように、トコジラミの発生している部屋は、最後に施工します。

それでは、トコジラミが発見された部屋を調査します。ヘッドボードを壁から外して裏側を目視調査すると、3齢虫と4齢虫が連なって潜伏していました（写真9）。潜伏位置が決まるとそこを定位置にして成長しますので、糞や脱皮した後の抜け殻が残ります。しかし、この部分にはそのような証跡は見当たりませんでした。周辺のヘッドボード裏やベッドのフレーム等をよく見ても、生息の証跡は何も見つかりませ

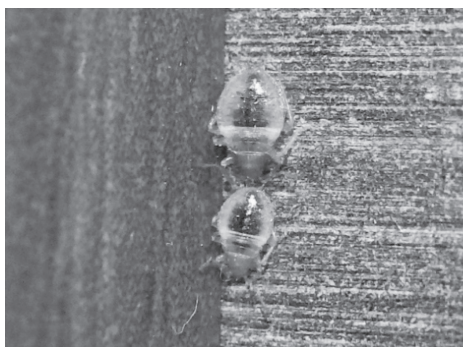


写真9 3齢虫と4齢虫

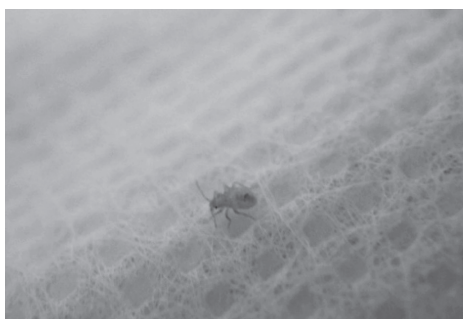


写真10 1齢虫

んでした。調査が終わったらトコジラミを室外に持ち出さないように、防護服に付着していないか、1部屋ごとに目視確認しますが、1齢虫が1匹付着していました（写真10）。おそらく掛布団を抱え込んだ時に付着したのだと思います。宿泊客が見つけたトコジラミは成虫でした。これらの成長段階の異なるトコジラミを合計4匹確認しましたが、生息の証跡が残っていないことと、成長段階ごとの生息数が少ないことから、今回見つかったトコジラミは持ち込まれて間もないのかもしれませんが、もしかすると発見した本人による持込み、あるいは、前回その部屋に宿泊した方が持ち込んだ可能性もあるのではないかという意見をホテルに申し伝え、ホテルスタッフはすんなりと納得してくれました。その理由は、今回トコジラミを見つけた宿泊客はフランス人旅行者でした。ちょうどその頃は、フランスでトコジラミが繁殖して、社会問題

になっているとニュースで報道されていました。推測の域を出ませんが、今後、外国人旅行者が増加すると、トコジラミの持込みリスクも高まるのではないかと危惧します。

トコジラミ対策マニュアル作成

数十から数百店舗を展開するホテルチェーンは、2010年頃からトコジラミの被害を度々受けるので、それぞれトコジラミ対策マニュアルを作っています。秋から冬にかけてトコジラミの発生が続いたことをきっかけに、2社からマニュアル改訂版の作成依頼を受けました。10年も経てば殺虫剤や捕獲資材も変化しています。トコジラミの駆除方法もホテル各社で既に変更した部分もあるでしょう。また、新型コロナウイルス感染症の感染の収束により、新人スタッフが入社している場合もあり、トコジラミ対策マニュアルの共有が必要だと思います。

都内のあるホテルで年末に、トコジラミの駆除依頼がありました。すぐに対処して、その後の状況は電話で確認していました。すると、まだ終息するには早い時期に、その部屋の利用が再開されていたので、生息がまだ残っているかもしれないことをお伝えしました。

たまたま他の用事で清掃時間帯に通りか

かったので、アポイントはとっていませんでしたが様子を見ようと急遽、そのホテルに寄りました。フロントでは20代に見えるスタッフが対応してくれました。周囲を確認したうえで、宿泊客や他の業者に「トコジラミ」の名称が聞こえないように、名刺の裏に描いたイラストを見せて、トコジラミを指さして「これの確認に伺いました」と言ったところ、「これではわかりません」と返ってきました（図1）。誰に聞こえてしまうかわからないので、名称を口に出すのは控えたほうが良いと思い、「今これで害虫駆除をさせていただいている者ですが、近くまで来たので様子を確認しようと寄りました。状況はお聞きになっていませんか？」と尋ねたところ、「知りません。アポイントをとっていますか。とっていないならお帰りください」と強い口調で追い返されました。

そのスタッフはトコジラミという虫を知りませんでした。現在その虫が職場に発生していて、駆除の最中であることも知りませんでした。これでは宿泊客からトコジラミの報告があった場合、円滑に対応できません。また、どの部屋で発生しているかわ知らされていないので、宿泊客をその部屋に通してしまいます。マズイことになる前に点検しようと思い、その日のうちにアポイントを取り、翌日に再訪問して、発生中の部屋を目視調査しました。心配していたとおり、まだトコジラミは生存していました。

マニュアルを作っても、それを読まないに役に立ちません。また、その手順どおり、対処を実施しないと十分な成果は得られません。マニュアル作りと併せて、トコジラミに対する社内研修も必要だと思いました。

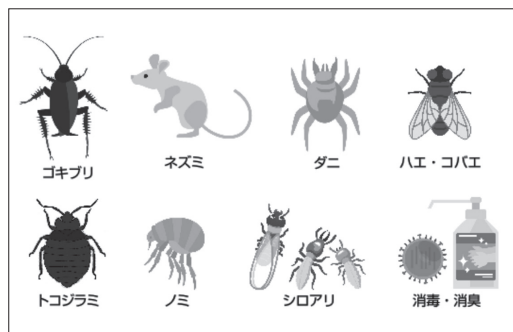


図1 名刺の裏のイラスト

被害はかゆみだけではない

2023年は家屋内でのトコジラミ駆除依頼が多い年でした。ご依頼者本人だけでなく、同居している家族も、かゆみとかゆみによる睡眠不足に悩まされ、心身ともに疲れきった様子の方もいました。私はトコジラミの観察のために発生中の部屋のベッドに横になってみたことがあり、うかつにも20分間眠ってしまい、そのわずかな時間で数十ヵ所も吸血されて、猛烈なかゆみと睡眠不足を経験したことがあります。黒や茶色の点を見ると一瞬、ビクッとしてしまいます。自分のホクロでさえトコジラミに見えて、点という点に対して敏感になってしまいました。

都内のある女性から「トコジラミがいる」という相談を受けて、調査のためにその方の家に訪問すると、玄関先に45Lのゴミ袋が20袋以上出されていました。家のなかに入ると、押入れが空になっていました。神経質になってしまい、気になる物はすべて廃棄したそうです。

同じような思いの方は他にもいました。その方は、寝室のベッドを含むその他の調度品や家財道具を廃棄して、大きくて重いタンスだけ残っていました。そもそも虫が嫌いなので、どこかに隠れていると思うと耐えられなくて、ベッドを買い替えた方もいらっしゃるようです。皆さんの共通点は、どこにいるのかわからないのが恐怖で、廃棄せざるを得ないということでした。

一方、寝具で寝ることが怖いという方には、わが社で仮眠用に用意していた折り畳み式の簡易ベッドをお貸ししました。ツルツルしたビニールの表面をトコジラミは滑って歩きにくいことを説明して、床にビニール袋を敷いて簡易ベッドを置き、刺さ

れにくい環境を用意しました。それでも、トコジラミが深夜に刺しに来ると思うと、恐怖で熟睡できなかったそうです。

薬剤噴霧から2ヵ月が経ち、かゆみも治まって新しいかゆみも生じないので、駆除は完了していると宣言しても、トコジラミに対する恐怖心は払拭できず、もしかしてまだどこかに隠れているのではないかと悪いほうに考え、おびえ続けている方もいました。夢にも出てきて目が覚めてしまうそうです。

このような苦しみから解放されたいがために、1分1秒も早く引っ越したい、と言っている方もいました。引っ越し先に持っていってしまう可能性を説明し、ここで駆除をしたほうが費用も最小限で済むと説得しました。トコジラミの被害は猛烈なかゆみだけでなく、精神的に大きなダメージを与えます。

海外のような社会問題になるか

海外では臨時的に、または緊急で使用できる殺虫剤を増やしましたが、日本は他の先進国と比べて、トコジラミに効果のある薬剤がすでにいくつもあります。また、それらを使用してトコジラミ駆除の経験を積んだオペレーターが、全国に存在しています。そのため、トコジラミの拡大があっても海外のニュースで見る程の大騒ぎにはならないと思います。

確かにトコジラミが我が家に発生、職場に発生すると厄介ですが、駆除は可能ですので、被害に遭っている方は、恥ずかしがらずに専門業者に相談しましょう。できれば、いくつかの業者の話を聞いて、予算や条件に合った方法で駆除できる業者を選ぶことが望ましいです。